

仙台藩茶道茶道頭二世清水動閑著『動閑茶湯書』の解説と校注(その二)『茅茸數寄屋寸法』の解説研究



仙台藩茶道石州流清水派宗家十一世
仙台藩志会常任理事
「政宗公ワールド」プロジェクト理事
東北大学名誉教授

大 泉 道 鑑(康)

仙台藩々祖伊達政宗公(永禄一〇年〜寛永一三年〜一五六七〜一六三六)は、茶道に造詣が深く、当時京都の高名な茶人であつた清水道閑(天正七年〜慶安元年〜一五七九〜一六四八)を、破格の待遇で仙台藩の最初の茶道頭に招聘した。一世道閑没後、二世清水動閑(慶長一九年〜元禄四年〜一六一四〜一六九二)がそれを受け継いだ。二代藩主伊達忠宗(慶長四年〜万治元年〜一五九九〜一六五八)は、二世動閑に四代將軍徳川家綱(寛永一八年〜延宝八年〜一六四一〜一六八〇)の茶道指南役に任ぜられた石州流の流祖片桐石見守貞昌(石州、大和国小泉、現在大和郡山市の大名)(慶長一〇年〜延宝元年〜一六〇五〜一六七三)に弟子入りするよう命じた。二世動閑は、石

州の許で十三年間修業を積んだ後に、帰藩して茶道頭に任命された。

一方、石州は徳川將軍家の茶道規格を定めた『石州流三百箇條』を家綱に提出し、これ以降石州流は將軍家の茶道として定着すると共に、全国各藩にも広められ、一世を風靡した。

仙台藩では、侘び茶を生涯探究し続けた石州の高弟の二世動閑が、『石州流三百箇條』に註解を大幅に加えた『清水動閑註解石州流三百箇條』(三卷)を著わした(『茶道辞典』)。また、この三百箇條は、これと密接な関連性を有する『動閑茶湯書』(十八冊)と共に、仙台藩茶道石州流清水派(当流)では今日まで聖典の役割を果たしてきた。この二つの二世動閑による茶湯書(「解題」の図1参照)は、清水派の祖(『茶道辞典』『原色茶道大辞典』三世清水道竿(寛文二年〜元文二年〜一六六二〜一七三七)以降の歴代茶道頭・宗家(「解題」の図2参照)が当流の代を継ぐ際にその都度秘伝書として手渡されてきた。そのため、当流ではこの両茶湯書が流派を正しく継承した証(三種の神器)のひとつとして扱われ、また当流の聖典の役割を果たしてきたものである(十一頁の「付記」参照)。筆者の祖母九世落合道鑑(明治一六年〜昭和四六年〜一八八三〜

一九七一）の代まで門外不出とされたこれらの茶湯書のうち、前者の三巻及び後者十八冊中の『客呼様之書』を含めた七冊は、筆者の母である十世大泉道鑑（明治四二年～平成二二年―一九〇九～二〇一〇）によって解読研究され、その研究成果が『清水動閑註解石州流三百箇條付仙台藩茶道』にまとめられ出版されたため、初めて世に明らかにされた。このことについては、近刊図書古田義弘著『仙台領に生きる郷土の偉人傳Ⅲ』にも詳述されているので、それを参照して頂ければ幸である。更に、後者の十八冊のうち『露地之書』及び『茅葺數寄屋寸法』（「解題」の図3及び図4参照）については、十世道鑑と筆者が共著で学会誌『茶湯文化学』の三十三号及び三十七号に、それぞれ最近論文として発表したため、その内容が初めて明らかになった。その後、前者の茶湯書の方は、筆者が『関』第三十号すでに紹介したので、今回は後者の論文の内容を簡潔に説明させて頂きたいと考え、筆を執った次第である。

さて、旧仙台藩領内には、当流歴代の茶道頭が庭園（茶庭）と茶室の作成に深く関わったとされる文化財が多く散在している。その中で、特に有名なのは、二世動閑作とされる伊達家御一家筆頭鮎貝氏の居館煙雲館庭園（国の史跡・名勝 気仙沼市）及び三世道竿により造られた岩出山伊達

家の大名庭園・旧有備館庭園とその池泉にある茶島の茶室（国の史跡・名勝 大崎市）である。筆者はここで述べた『茅葺數寄屋寸法』の解読研究成果が、仙台藩の茶室等の文化財だけに止まらず、侘び茶を大成した茶聖千利休（大永二年～天正一九年―一五二二～一五九一）以降のそれらの特徴や成り立ちを明らかにする研究の進歩に貢献するのではないかとおおいに期待している。

紙面の都合を考慮し、また論文の概要の理解の便のため、その投稿に用いた「要旨」に加え、この論文からは「解題」の箇所のみを選び、多少修正を加えて六頁及び七～十一頁にそれぞれ示した。なお、その論文の内容の詳細については、『茶の湯文化学』三十七号の六十八～八十一頁に掲載されているので、それを参照して頂きたい。

【謝 辞】

筆者が『茅葺數寄屋寸法』の解読研究成果を、『茶の湯文化学』に投稿する際に、その原稿の御校閲と解釈の困難な用語について御指導賜りました東北工業大学建築学准教授中村琢巳先生並びに解読の困難な箇所のご指導を賜わりました元宮城県史編纂室故岩間初郎先生に謹んで感謝の意を捧げます。また、終始有益なご助言を頂きました東北

工業大学非常勤講師氏家清一先生、更に大泉研究室森聡子様、志村佳苗様、尾上望様及び遠藤明希子様に感謝申し上げます。

【参考文献】（五十音順）

『岩出山町史通史・上巻』岩出山史編集委員会

平成二十一年

『片桐石州の茶』米原正義等 講談社 昭和六十二年

『茅葺數寄屋寸法』二世清水動閑 十一世大泉道鑑蔵

『関』（第二十七号）十一世大泉道鑑 全日本石州流茶道協会

平成二十九年

『原色茶道大辞典』井口海仙、末宗広、永島福太郎（監修）

淡交社 昭和五十年

『茶道辞典』桑田忠親 東京堂 昭和四十三年

『清水動閑註解石州流三百箇條』（三巻）二世清水動閑

十一世大泉道鑑蔵

『清水動閑註解石州流三百箇條付仙台藩茶道』十世

大泉淑子（道鑑） 丸善出版センター 昭和五十五年

『数寄道心法』東京国立博物館蔵

『石州流系図写并聞書ノ写』鈴木政道 東京国立国会図書館蔵

『仙台領に生きる郷土の偉人傳Ⅲ』古田義弘 本の森

令和四年

『伊達綱村公の遺徳を偲ぶ』東海林恒英監修、菅野正道編

集指導 大年寺会遠忌記念事業委員会 令和元年

『茶室露地大事典』中村昌生（監修）淡交社 平成三十年

『茶の湯入門』熊倉功夫 平凡社 昭和六十年

『茶の湯文化学』（三十三号）五〇―六一頁 十世大泉道鑑

十一世大泉道鑑 茶の湯文化学会 令和二年

『茶の湯文化学』（三十七号）六八―八一頁 十世大泉道鑑

十一世大泉道鑑 令和四年

『茶の湯文化学』（二十八号）九〇―一〇〇頁 十世大泉道鑑

十一世大泉道鑑 茶の湯文化学会 平成二十九年

『宮城県の名勝に関する特定の調査研究事業報告書』

文化庁・宮城県教育委員会 平成二十八年

『大和郡山市史』本編一〇六三頁 昭和四十一年

『よくわかる茶道の歴史』谷端昭夫 淡交社 平成十九年

『露地之書』二世清水動閑 十一世大泉道鑑蔵

『動閑茶湯書』の解説と校注（その二）

『茅葺數寄屋寸法』の要旨

解説

（故）十世 大泉道鑑

十一世 大泉道鑑

校閲

中村琢巳

片桐石見守貞昌（石州）の高弟である仙台藩茶道石州流

清水派（当流）二世清水動閑の著書『動閑茶湯書』（十八冊）

の中に『茅葺數寄屋寸法』がある。その内容については、

当流では長い間門外不出であったため、未だ公表されてい

なかった。この古文書（文献）の冒頭には「北野大茶湯之

時、利休此數寄屋 始テ作ル。寸法、此巳（イ）後ヨリ此

寸法ニテ 數寄屋囲出来（一）申（モウス）事也。」と

記されており、茶湯を大成した茶聖千利休の茶室に対する

基本理念を示す重要な内容を含んでいると考えられる。

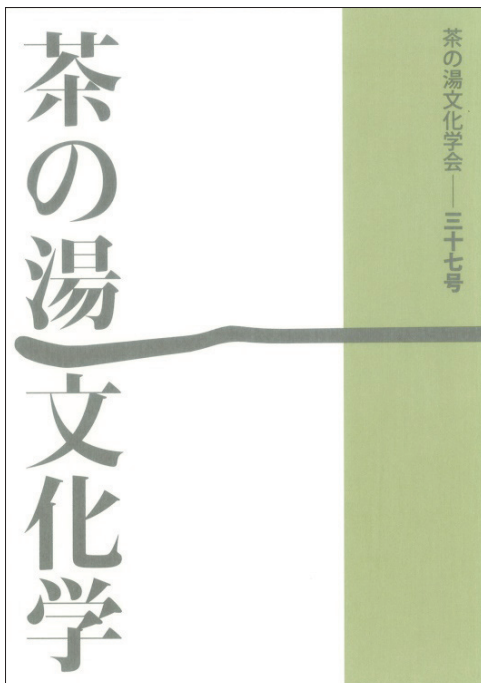
その具体的な内容としては、茶室を構成している部分の

実際の寸法からその作成の方法とその心得の詳細が含まれ

ている。例えば、茶室の柱、軒の桁、屋根裏の軒や檼、床

とその落懸、敷居、立付の柱、止り柱、束柱、木舞、鴨居、
櫛形、おちの棚、座敷の潜りとその戸、棟樋、衝上と洞
戸・雨戸、眉包み、軒、茅葺とその関連部材、額、袴腰の
板、窓、障子、代戸等の茶室の構成部分に及んでいる。

以上述べた内容は、当流の茶室の作製の指針となったた
けでなく、石州流全般の茶室の特徴を明らかにし、利休以
降の茶室の成り立ちを説明する手掛かりになると期待さ
れる。



『茶の湯文化学』37号表紙

『動閑茶湯書』の解説と校注（その二）
『茅葺数寄屋寸法』

解説 （故）十世 大泉道鑑

十一世 大泉道鑑

校閲 中村琢巳

【解題】

数寄屋という言葉は、現在では茶室と同様な意味で使われているが、この茶室の系譜は二つに大別され、そのひとつは室町時代に見られた会所のような書院（広間）で、もうひとつはわび茶誕生後の草庵茶室と言われているものである（『茶の湯入門』）。室町時代でもすでに書院造りの中に茶室風の数寄屋が建てられていたが、茶聖千利休（大永二年～天正一九年Ⅱ一五二二～一五九一）の時代には茶室を数寄屋、囲い、座敷、小座敷あるいは茶湯座敷と呼ぶようになった（『茶道辞典』）。利休没後、代表的な大名茶の茶人古田織部（天文一三年～元和元年Ⅱ一五四四～一六二五）及び小堀遠州（天正七年～正保四年Ⅱ一五七九～一六四七）の茶室には、鎖の間や広間も見られるようになり、また荘厳な東山時代の唐物の茶風も復活したように

見受けられた。ところが、同じ大名茶人でありながら片桐石見守貞昌（石州 慶長一〇年～延宝元年Ⅱ一六〇五～一六七三）は、わび茶を深く探究し続け、なおかつ貴族的な「高貴さ」を取り入れて石州流を完成させた（『清水動閑註解石州流三百箇條付仙台藩茶道』『よくわかる茶道の歴史』）。石州は、大和小泉の居城の北方の丘に慈光院を創建し、亭主床の形式を有する二畳台目や三畳の草庵茶室及び書院を建設した。また、奈良の当麻寺中之坊には四畳半で円窓を有する茶室を建てたが、これは草庵の風躰から離れた新しい作意を持つものとして興味深い（『片桐石州の茶』）。

一方、仙台藩茶道は、藩祖伊達政宗（永禄一〇年～寛永一三年Ⅱ一五六七～一六三六）が京都で活躍していた高名な茶人一世清水道閑（天正七年～慶安元年Ⅱ一五七九～一六四八）を、茶道頭に招聘したことに端を発している。その跡を継いだ二世清水動閑（慶長一九年～元禄四年Ⅱ一六一四～一六九一）は、二代藩主伊達忠宗（慶長四年～万治元年Ⅱ一五九九～一六五八）の命に従って、石州流の流祖石州のもとで一三年の永きにわたり、茶湯の修行を積み、帰藩後茶道頭に任ぜられた（『数寄道心法』『石州流系図写并聞書ノ写』）。二世動閑は、石州が徳川將軍家の茶道

の規格を定めた世に言う『石州流三百箇條』に註解を大幅に加味した『清水動閑註解石州流三百箇條』（三卷）『茶道辞典』及びそれに関連の深い茶湯書『動閑茶湯書』（一八冊）を著わした（『清水動閑註解石州流三百箇條付仙台藩茶道』）。この二つの文献は（図1）、仙台藩茶道石州流清水派（当流）では、歴代の茶道頭・宗家（図2）を経て、筆者に正しく継承されてきた証となるものである。しかも、これらの内容は、十世大泉道鑑（明治四二年〜平成二二年Ⅱ一九〇九〜二〇一〇）が前者の三巻に加えて後者の一八冊中の『客呼様之書』『客挨拶之書』『客呼様客振之書』『床之内之書』『風炉茶之湯之書』『三斎公御咄之書』及び『道具押形』の七冊の解読研究を行って、前に触れた著書を上梓したことにより、初めて明らかにされた。最近、筆者はこの『動閑茶湯書』の未発表の一冊のうちの『露地之書』の翻刻を『茶の湯文化学』第三三号に発表した。この『動閑茶湯書』に含まれていた『茅葺数寄屋寸法』（図3）の翻刻はそれに次ぐものである。

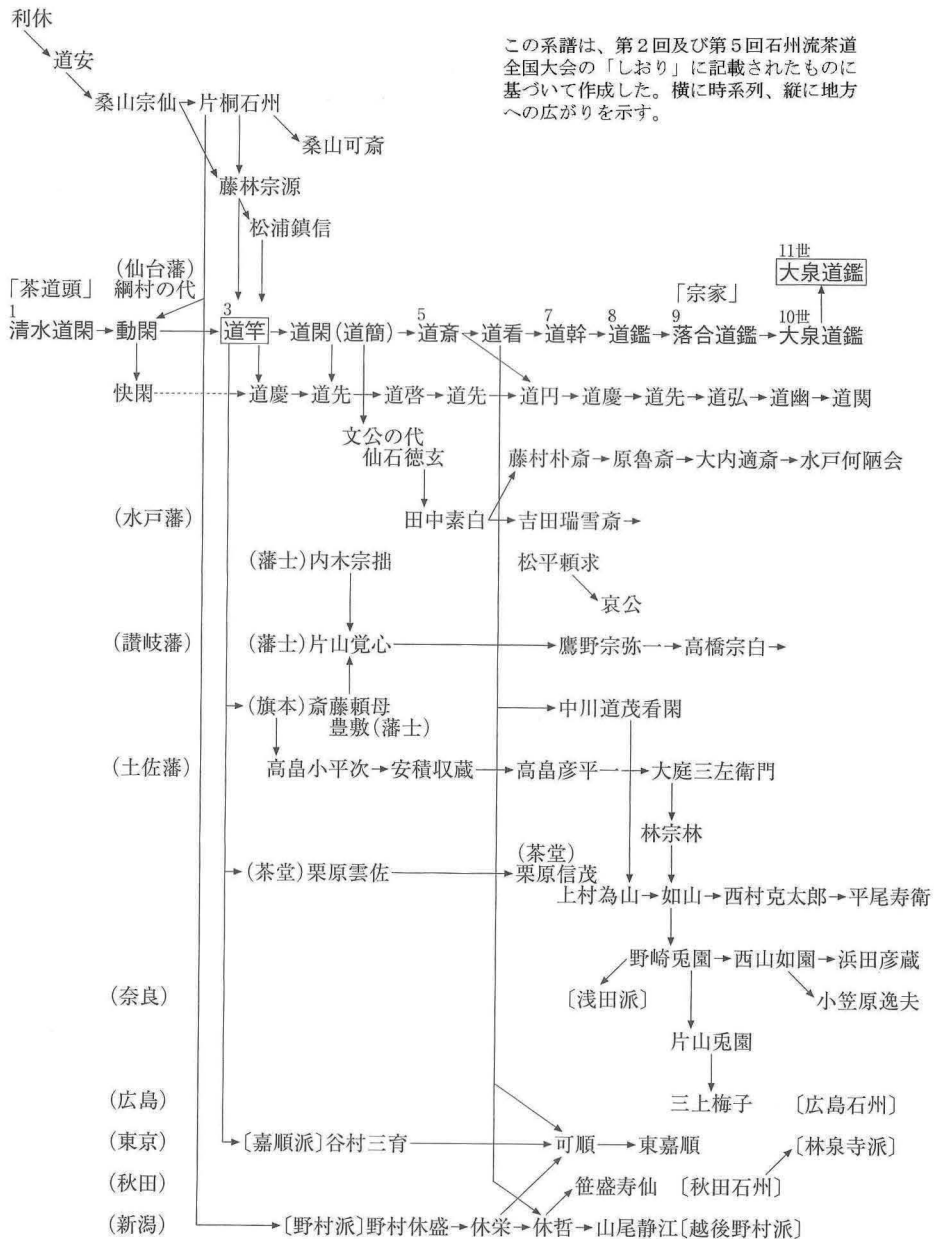
この数奇屋に関する文献の冒頭には「北野大茶湯之時、利休此数奇屋始テ作ル。寸法、此已後ヨリ此寸法ニテ数奇屋囀出来申事也」とあり、これに続いて具体的内容として、茶室の建て方、その心得及び建材の寸法の詳細が記述され



図1 『清水動閑註解石州流三百箇條』
（下段3巻 大きさ：横15.0cm、縦20cm）
及び『動閑茶湯書』
（上段18冊 大きさ：横15.5cm、縦20.8cm）

ている（図4）。その具体的な茶室の構成部位として、柱、軒の桁、屋根裏の軒や垂木、代戸等に言及している。従って、わび茶を大成した利休及びそのわび茶を深く探究した石州の茶室に対する理念が色濃く反映されていると考えられる（『片桐石州の茶』）。

石州流清水派の系譜



注：この系譜は、横に時系列、縦に地方への広がりを示す。

図2 石州流清水派の系譜

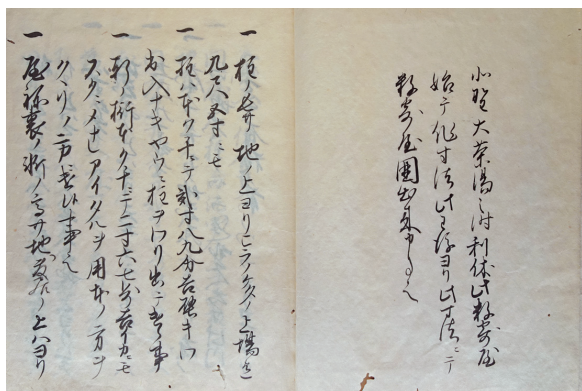


図4 『茅葺数奇屋寸法』の
本文の一丁目(右)及び二丁目(左)



図3 『茅葺数奇屋寸法』
丁数：28枚
大きさ横15.5cm 縦20.8cm

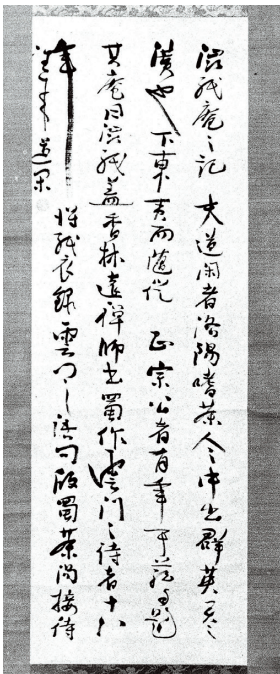
さて、旧仙台藩領内には、当流歴代の茶道頭が作庭に深く関わったとされる文化財指定の庭園が散在している。国指定文化財としては、二世動閑が作庭したと伝えられている伊達家御一家筆頭鮎貝氏の居館の煙雲館庭園(気仙沼市)及び当流の祖三世清水道竿(寛文二年〜元文二年Ⅱ一六六二〜一七三七)により造られた岩出山伊達家の大名庭園・旧有備館庭園(大崎市)の二つが池泉回遊式庭園として特に有名である。この前者の中の居館には、今では茶室が見当たらないが、後者の池に浮ぶ御中島(茶島)には、四畳半の茶室が現存しており、その中に三世道竿作の花筒が掛けられていたと言う。その他、三世道竿の作庭と言われてきたものの中には、佐沼城々主亘理氏庭園(露地)とその邸宅もよく知られており、その母屋には茶室が残されている『関』。しかしながら、これらの茶室の作者等には不明な点が多く、これらを解明する研究は緒に着いたばかりであると言っても過言ではない(『宮城県の名勝に関する特定の調査研究事業報告書』)。従って、今回の翻刻資料は、旧仙台藩内に残されているこれらの茶室の成立等の詳細を解明する研究に手掛かりを与えるものと考えられる。

以上述べたことを総合的に考察すると、ここで示した『茅葺数奇屋寸法』は、当流の茶室の作製の単なる指針となっ

ていただけに止まらず、石州流全般の茶室の特徴を明らかにし、更に利休以降の茶室の成り立ちを解明する研究の進歩に貢献すると期待される

【付記】

藩政時代以来、今日まで当流を継承した印（『三種の神器』）の重要な役割を果たした資料として、【解題】の図1に示した二世動閑が著わした茶湯書に加え、妙閑子老中松平周防守康福自画賛の『片桐石見守貞昌宗閑居士像』（右側）及び二世動閑筆『渋紙庵之記』（左側）の二幅の掛軸である。前者の掛軸を入手したのは、当流の祖三世清水道竿の後継者である四世清水道簡（享保元年～天明三年―一七六〇―一七八三）である。一方、幕府の茶道方の数奇屋頭（格）を務めた中心的人物であった谷村三育（石州流嘉順派の祖？年～宝暦三年―？～一七五三）の師は、三世道竿であり【解題】の図2及び『清水道閑註解石州流三百箇条付仙台藩茶道』参照）、しかも康福の茶道の師匠はこの三育である（『伊達綱村公の遺徳を偲ぶ』）。従って、四世道簡と三育の共通の師は、三世道竿であるという事実を考慮すると、四世道簡がその掛軸を入手することが可能であったと考えられる。



『渋紙庵之記』二世清水動閑筆



『片桐石見守貞昌宗閑居士像』
妙閑子（老中松平周防守康福）自画賛